常葉大学短期大学部紀要 48 号
27-35　2017.

保育者養成校における表現指導の取り組み
－表現の深まりを目指して－

The way of teaching “Expression” in schools for infant educators
－ Towards making “Expression” more meaningful －

加　藤　明　代
KATO Akiyo

キーワード：表現指導、表現発表会、深まり、成果
Keywords: The way of teaching “Expression”, Presentation, Deeper meaning, Reflection

保育内容研究Ⅴ（表現 B）では、子どものたちの多様な表現を受け止め育てるために必要な学生自身の表現力を深めていくことを願い、授業改善に取り組んでいる。本研究はその願いのもとに実施した表現発表会に至る実践を振り返り、その成果を検討し、今後の授業改善への手掛かりを得ることを目的とした実践報告である。

発表会を通して相互の演技を観賞することが、自分自身やグループの取り組みを振り返る好機になったことが多くのレポートから認められた。質問紙調査の結果からは、実践に対する満足感を妨げた主たる要因として「時間」「計画性」「協力」の欠如が認められた。しかしながら「満足できなかった」という振り返りの中にも、価値ある学びがあったことが確認できた。「手のダンスと足のダンス」は、その創作過程及び発表において学生に様々な気づきを促した点において成果があったと考える。

Ⅰ．はじめに

本学では 1 年次に通年授業「保育内容研究Ⅴ（表現 A）」を、2 年次後期に授業「保育内容研究Ⅴ（表現 B）」を設定している。

1 年次では専門の異なる複数の教員が協同で授業を担当しており、多様な表現を総合的に展開することによって、学生は自由に表現する楽しさ・喜びを体験的に学びながら、子ども理解及び保育内容のあり方に対する理解を深めている。

それに対して筆者が担当する 2 年次の「保育内容研究Ⅴ（表現 B）」では、これまでの表現系授業で培った表現の理解や技能を基盤に、「子どもの多様な表現」を支えていく土台となる「学生自身の感性・表現力」を様々な活動を通して一層高めながら、「表現」とは人や物との関わりを通してより育まれ深められていくことを学んでいく。15 回授業の前半は、身体・音楽表現を中心に幾つかのテーマを演習形式で進め、後半は、「学びの発表の場」として発表会を位置づけている。1 年次の「表現の広がり・つながり」の中で体験を積んだ学生たちに、一層の「表現の深まり」を願うものである。

本研究ではその願いのもとに実施した表現発表会に到る実践を振り返り、それが学生に

とって効果ある取り組みになったかを検討する。発表会に先だって 3 つのねらいを設定した。それらを「表現の深まり」を捉える視点として、その達成状況を通して考察する。学生にとって深い学びを保証するにはどのような題材をどのように実践していくか。その手掛かりを得るとともに、今後の授業改善に生かしていくことが目的である。

Ⅱ．研究方法

発表会終了後に実施したレポート、及び質問紙調査の結果から考察する。尚、その使用については事前に口頭と文書で被験者に説明を行っている。

1．対象授業：「保育内容研究Ⅴ　表現Ｂ」 授業回数　5 回
2．研究対象：Ｔ大学短期大学部　保育科 2 年生　199 名
3．研究期間・場所：平成 27 年 12 月～平成 28 年 1 月、発表会　平成 28 年 1 月 22 日
オレンジホール（Ｔ大学附属中・高等学校との共有施設）

発表会実施にあたり、ステージ下手に「足のダンス用」舞台、上手に「手のダンス用」舞台、その 2 つの舞台をつなぐ形で中央に 1.5m 幅の暗幕を設置した。足のダンス用舞台は上半身部分を、手のダンス用舞台は下半分を暗幕で隠している。

4．題材、及び題材設定の理由

題材：「手のダンス」と「足のダンス」
（以下、手とは上肢、足とは下肢の部分を指すこととする）

題材設定の理由（授業者の願い）：

これは、カール・オルフの音楽教育夏期セミナー[1]において、熊谷礼子氏が紹介した「足のダンス」をヒントにしたものである。ダンスというと、それを得意とする一部の学生が主導権を持ってしまいがちであるが、“足や手”に表現手段を限定することによって、苦手意識に左右される状況が緩和されるのではと考えた。また手は、毎日子どもに触れ合う保育者にとって、ことば同様に、気持ちや思いを代弁する表現手段の一つである。だからこそ、表情豊かであってほしい。足も、子どもと一緒に思い切り園庭を駆け回る身体の一部である。そのような手や足に意識を向けて、それらの動きの面白さを探り、「表現する」醍醐味を味わってほしいと願い、題材を設定した。

5．ねらい

①手や足の表現（形や動き）の可能性を探り、表現することを楽しむ。
②音楽をよく聴いてイメージを広げながら動きを工夫する。
③一人ひとりがアイデアを出し合い、個の違いを生かし合いながら協力して進める。

「表現の深まり」を捉える視点として、上記の 3 つのねらいを設定した。

6．創作の内容と方法

・音楽に合わせて「手のダンス」と「足のダンス」を創作する。

音楽は、単に雰囲気をつくるためのダンスの伴奏曲ではなく、動きのイメージを触発するものであり、音楽をよく聴いてその変化をキャッチしながら動くことを重視した。

・音楽は２曲使用する。

複数の課題曲を提示し、少なくとも１曲は課題曲から選択するものとした。同じ課題曲の使用によって、発表会では「音楽の捉え方や動き」の多様性を一層視覚的に体験できるのではないかと期待した。課題曲は以下の４曲である。

課題曲：チャイコフスキー作曲　くるみ割り人形より「行進曲」
ブラームス作曲「ハンガリー舞曲第５番」
ボッケリーニ作曲「メヌエット」
エルメンライヒ作曲「紡ぎ歌」

・発表グループは８～９人で構成する。「手のダンス」と「足のダンス」のどちらを担当するか、また人数配分についてはグループで決定する。
・手（足）に人形をつけたり、顔を描いたりするのではなく、手や足それ自身の動きや表情を生かして創作する。
・楽器・音具の使用は可能である。ダンス以外の表現と組み合わせても構わない。
グループ活動の進度に差が出ることを想定して、そのパフォーマンスの内容に柔軟性を持たせた。

７．指導上の配慮

・創作過程として３つの段階を提示し、音楽と動きの関係を意識するよう促した。
①音楽を知る（音楽の構成を把握する）段階

課題曲については、その特徴把握の参考資料として、音楽の構成を図式化したものと楽譜を配布した。自由曲については、希望に応じて助言を行った。

②音楽にのって即興的に動く段階

気持ちを開放して素直に思いのまま表現することを楽しむ段階である。何度も音楽を聴きながら動くことを通して、各自が音楽を身体全体で感じとることを重視した。

③動きを整理し、創作する段階

尚、ＣＤカセットレコーダー、及びポータブルスピーカーは各グループに設置している。

・導入の活動は教員が担当し、活動に入りやすい雰囲気作りを心がけた。
・毎回のグループ記録と個人記録では、学生自身は進行状況の確認を行い、教員はその躓きの状況によって助言を行った。
・中間発表を設定した。そのビデオ視聴によって振り返りを行った。
教員からの助言は最小限に、そのタイミングに配慮した。
・ホールでのリハーサルは授業内と授業外の両方に設定し、授業外で使用の場合はグループ間で時間帯を調整することとした。

Ⅲ．結果と考察

１．発表後の質問紙調査を通して（回収率 83%）

表現発表会への取り組み状況、及び満足度について質問紙調査を実施した。

全体の 90% が、自分は能動的に練習に参加したと答えている。加えて、発表会に対する満足度を５段階（５が最高値）で表記すると、86%が「全体発表あるいはグループ発表」を

4 または 5 と評価している。しかしながら、「グループ発表だけ」を見ると 23%が、「全体発表だけ」を見ると 26%が満足度 3 以下である。その満足度 3 以下の学生の取り組み状況については、「グループ発表」も「全体発表」も 5%が「どちらともいえない」と応えている。「グループ発表」も「全体発表」も満足度 2 以下は 3%と少ないが、「全体発表」と「グループ発表」の満足度に 2 ポイント以上の開きがある学生、「能動的に活動に取り組めたとは言えない」と答えた学生も僅かながらいた。取り組み状況や満足度の低い理由には「グループ全員がそろわずに時間が足りなかった」「実習で十分に参加できなかった」と応えている。それと呼応して「活動が充実するために何が必要であったか」という設問に対しては、「時間」「計画性」「協力」の選択肢に回答数が多い。

「発表会までに何が一番大変でしたか」の自由記述にも「時間が足りない」ことをあげている。授業外の時間を使って自主的に活動することに抵抗がある学生も少なくないのが本学の現状である。活動に先立って計画的に行う必要性を説明したが、この点において課題が残る結果となった。

「(5 人中) 3 人しかいなかったので進まなかった」という記述も見られた。授業担当者として、全員がそろわずとも可能な取り組みがあることを気づかせ、前向きに進めるための援助が必要であった。その他、「大変だったこと」の設問に対する最も多い回答は「動きを考え覚えること」であった。「なかなか動きが浮ばなかった」と、通常のダンスと異なることに逆に戸惑いを覚えたようであるが、「鏡の前で見せ合った」と、試行錯誤する様子も認められた。

また「発表会で何が一番楽しかった・嬉しかったですか」という設問には、「他グループの観賞」「協力して一つのことをやり遂げた達成感」「創っていく過程。練習」「楽しくみんなで取り組めたこと」という回答である。

創作過程における仲間とのあり方が、学生の「満足度」の結果にも大きく影響していることが認められた。その詳細は、「ねらい」に対する成果の達成状況の考察を通して明らかにしていく。

2.「ねらい」に対する成果と課題

質問紙調査の自由記述、及びレポートの分析から明らかになった成果及び課題について記述し考察する。

ねらい①「手や足の表現の可能性を探り、表現することを楽しむ」について

「これほどいろいろな動きができることに感動した」「同じ曲なのに全く違った形や動きを見て驚いた」と表現の多彩さに触れた感想が多い。その動きの発見には「足を上にあげる動作一つとっても、高さや角度で見え方やメッセージの伝わり方が大きく異なることに気づかされた」「手を広げて速く動かして水しぶきを表現しよう」「腕を出した方が波に見えるね」と具体的なイメージをどのように動きで表現したかを表した記述もある。通常のダンスであれば、アイドルグループが踊る「お決まりの」「お気に入り」の振り付けになりやすい。手や足に限定したからこそ、先入観にとらわれない動きの探求が必要であったと考える。

「表現することを楽しむ」ということについての記述は多い。例えば「表現しようとしているグループは始まってすぐ分かった。顔が見えなくても楽しんでいることが手や足から伝

わってきた」「私たちは足しか見えない黒い幕の後ろで、手や体も動かしながら笑い合い本当に楽しく表現していた」である。演じ手の心情は、顔が見えなくとも足や手の表現から伝わっている。それによって観る側と演じ手の双方が共にその楽しさを共有している。

「動きを決めては実践し、また話し合い動きを変えていくことの繰り返しだった」という活動の様子には、表現を深めていくことへの積極的な姿勢が認められる。「伝えたい思いを足だけで表現する難しさも感じたが、それが試行錯誤の機会となって、よりチームとしてまとまるきっかけとなった」と、直面する課題を乗り越える過程に、ねらい③に通じる学びがあったことが認められる。

また、「どんな風に動かそうかと前向きに考えればたくさん面白い動きや表現の仕方が生まれると学んだ」「手だけでは限界があると思うことが自分たちの振り付けの幅を狭くしていた」の記述に注目したい。内省することを通して、自己の表現の限界を作っているのは、意識の持ち方にあると気づいた例である。

グループ活動の初期は、その動きや形に独自性が乏しく、戸惑いながら進行している様子があった。ダンスの素材として扱う前に、手や足の日常的な働きや役割に目を向けたり、描く・音を奏でる・手遊び・足遊びなど手や足を使った活動と併せて、段階的に行うことも必要であったと感じる。

ねらい②「音楽をよく聴いてイメージを広げながら動きを工夫する」

楽譜に書きこみをしながら何度も音楽を聴く姿があった。音楽の全体的な曲調だけでなく、部分的に繰り返し音楽に耳を傾けることによって「音が増えたから、人数も増やしていこう」など、その変化を捉えている記述もあった。

音楽と動きについては、「同じリズムでも音の大きさに変化があることに気づいて手の表情の変化を変えた。それから今まで以上に曲を良く聴いて動くように意識した」「『ここはこんな感じじゃない？』『はねているようだね』など音楽を聴きながら意見を出し合うのが楽しくなった」など、音楽が動きのイメージを引き出し、それに気づくことで「聴く」という姿勢そのものにも変化が起こっていることが読み取れる。

豊かな感性を育てるためには、主体的に「聴く」という姿勢が必要だと考える。日常的に音が溢れている現代においては、音を聞き流して生活する環境に身をゆだねていると言えるであろう。音楽表現系の他の授業とも関連性を持ちながら、主体的に「聴く」という意識を持てるような環境づくりも課題である。

ねらい③「一人ひとりがアイデアを出し合い、個の違いを生かしながら協力して進める」

「まずは曲を聴いて一人一人が感じた動きをそのまま表してみることから始めた～友達の動きを模倣し合うことで、それぞれの動きの面白さを共有しあった」「リズミカルな音楽だったのでまず足で自由に走ったり跳ねたりした」と、音楽のイメージを動きにしたり、動きの模倣を楽しむことから始まったグループもあれば、「『何かを追いかけている感じ』『小さい動物が出てきそう』など、音楽を聴いて思い浮かぶことを言葉にすることから始めた」グループもあり、その初期の取り組みは、グループによって様々であった。

また、最初から全てのグループに活発なやり取りが見られたわけではなく、積極的に活動しているグループに刺激されながら、話し合いをせざるを得ない状況が進行していったと言

える。「何度も音楽を聴いて身体を動かすことで、メンバーの気持ちが次第に同じ方向に向かっていくと同時に、足のダンスの振りもそろってきた」と記述にあるように、徐々に意識が変化していった様子が認められる。そして「お互いに意見を言いながら取り入れていく過程がとても楽しかった」「アイデアを採用されたことが嬉しい」と、意見を出し合うことが喜びに繋がっている。「どうしたらこの音楽のイメージを表現できるのか、どうしたら見ている人に伝わるのか、妥協せずに話し合いをして練習した分だけ素敵になった」には、“もっと良くなりたい、もっとできる”すなわち“表現を深めたい”という願望が認められる。

本番が練習通りにできなかったことに対して「とても悔しく、グループのみんなに申し訳ない。それはこれまで協力して頑張ったからこそ、こういう気持ちになれたのだ」にはこの活動に全力で取り組んだということが表れている。また、「普段ダンスをしない私にとっては大変で不安だった。～メンバー全員が声を掛け合って練習し、みんなのやる気に感動した。みんなが一生懸命だったから私も頑張れた」の記述には、仲間の存在が心理的な支えとなり、意欲をもって取り組む原動力となったことが読み取れる。

しかしながら一方で、活動が思うように進まなかったグループもあった。質問紙調査では、発表会を満足するには主として「時間」「計画性」「協力」が必要だったという結果を得ている。それと合わせて要因をみていくと以下のようになる。

1 つには、物理的要因によるものである。2 年次後期は異なる時期に実習が入り、それが 12 月まで続く。加えて就職活動も重なることが、授業参加姿勢にも少なからず影響してしまう。活動の初期から計画的に進めていくよう助言をしていたが「全員がそろわずに団結力を持てなかった」という現状が認められた。活動を充実させるためには、人間関係を構築する時間が予想以上に必要であった。人数がそろわないことへの不安や焦りを訴えた感想も見られた。

2 つ目は意見の食い違いによって協力体制が十分構築できなかったことによるものである。「自分の考えが友達に伝わらないことが多々あった。同じ曲を使っても全く違う踊りになるということは、人それぞれ異なる感性があるからで、そこに他の人と一緒につくることの難しさを感じた」という記述がある。意見の相違は、グループ活動を展開していく際に生じる日常的課題の一つである。これによる葛藤こそが創作活動における貴重な経験であり、その蓄積が解決力・克服力などの獲得に繋がってくると考える。

3 つ目は、学生自身の意欲・関心に起因するものである。観賞後のレポートには「練習をしっかりしてできないのと、練習しないでできないのでは全く違うことを痛感した」と、振り返る記述もあった。反省の中から貴重な学びを得ている。

3.「表現指導」の側面から

毎時の導入は教員が担当した。雰囲気づくりであり、身体と心のウォーミングアップの時間でもある。短時間ではあるが、導入で行った遊びを手がかりに、「動きが浮かんだ」という感想もあった。「毎回のウォーミングアップのリズム体操は、恥ずかしい気持よりも仲間と一緒に楽しむ時間になっていった」とあるように、導入の活動が効果を得ている。

中間発表と最終授業日には撮影を行い、学生自身が客観的に演技をみる機会を持った。その際は教員から助言を行ったが、毎時の活動ではグループを巡回しながらも必要以上の助言は控えて、学生の主体性を重視した。面白い動きや取り組みに対しては積極的に声をかけ、

学生の意欲を認めることを心掛けた。しかしながら活動が停滞しているグループに対しての助言には難しさを感じることもあった。直面している問題に耳を傾け、共有する姿勢を持って学生たちの心情に寄り添っていくことが大切であると感じている。

４．題材としての可能性

１つには、素材としての「手や足」の魅力である。動かすことに特別な技術が必要でないため、子ども達にとっても、日常生活の動きや心情の表現を支える身近な手段•道具である。それだけに日常生活の中では手や足の動きが意識されることは少ないが、保育者においては表情豊かであってほしい。

通常のダンスだと、ダンス経験者が主導権を握ってしまい、定型の振り付けに陥ることも少なくない。しかしながら「手だけ」「足だけ」のダンスはどの学生にとっても初めての体験であったため、先入観にとらわれない動きの探求が可能となった。「何気なく使っていた手を意識するようになった」「私の頭の中にあるダンスのイメージは、AKB が踊るようなダンスだった。（中略）移動手段としての足というイメージが強かったが、足にも様々な表現や動きがあることに気づき、いつも私を支えてくれているという力強さやありがたみを感じた」と、手と足の可能性の発見と共に、“日常の中の”手や足に対する意識にも変化があったことが記述されている。

２つ目には、音楽•動き、そして造形への広がりを持った活動になっていることである。「手と足のダンス」は、そのねらいの一つに音楽と動きの探求があるが、複数の手や足が組み合わさって形作るということは、造形的な視点も求められていることになる。

３つ目には、“客席が見えない”という特徴によって、羞恥心を感じやすい学生にとっても挑戦し甲斐のある表現題材となったことである。足のダンスは上半身を、手のダンスはその逆を暗幕で覆うため、演じ手は客席を見ることができない。そのため、過度な緊張をせずに動くことに集中できたようである。

４つ目には、一人ひとりの主体的表現を奮い起こす題材となったことである。ホールの舞台は奥にいき過ぎると客席から動きが見えにくいため、前後に広がる隊形はとりにくい。自分より前列の人を見ながら合わせて動く、というわけにはいかない。「他の人を見ている余裕はない。しっかりと覚えて合わせるのが大変だった」とあるように、一人ひとりが音楽をよく聴いてタイミングをとりながら動くことが必要であった。

５つ目には、自由な展開の可能性を持っていることである。最初は手と足の担当に分かれて創作していたものが、最終的には１つの曲の中に手と足の両方が登場したり、手のダンスと足のダンスが行き来をしながら展開したり、ダンスの前後にプロローグとエピローグが付け加えられ、手のダンスと足のダンスが１つの物語の中に登場するなど、様々な工夫が見られた。練習を重ねるにつれ、独立した手のダンス・足のダンスの枠を超えてイメージが広がり、作品が変化していく様子が認められた。

以上より、「手のダンス」と「足のダンス」は、表現を探求し、一人ひとりの主体的な表現を生かすことのできる有効な題材であったと考える。

Ⅳ．おわりに

発表会を通して相互の演技を観賞することが、自分自身やグループの取り組みを振り返る

好機になったことが多くのレポートから認められた。そして「手のダンス」と「足のダンス」はその創作過程及び発表において、学生の様々な気づきを促した点において成果があったと考える。そして「満足できなかった」という振り返りの中にも、価値ある学びがあったことが認められた。尚、「ねらいに対する成果」については、量的測定を併用して行い、客観的な裏付けが必要であった。今後の課題としたい。

「手のダンスを考えているとき、授業で行ったアンサンブルを思い出した。手のダンスも仲間との呼吸を合わせているので“アンサンブル”だと感じた」という感想があった。アンサンブルは仏語で「調和」の意味がある。「一人ひとりが自分を発揮すること」と「互いを認め合って生かし合うこと」双方があってこその「人と人とのアンサンブル」である。また発表会に向けてのこの活動は「音楽と動きのアンサンブル」であり、そして「手と足のアンサンブル」でもあったと言える。

今後も授業内容と発表とを関連付けながら、学生の多くの気づきを呼び起こすことのできる授業実践を検討したい。

註

1．カール・オルフの音楽教育夏期セミナー（平成 26 年 8 月 11 日開催）において、熊谷礼子氏の分科会の中で、そのプログラムの 1 つに「足のダンス」が紹介された。

平成27年度　表現発表会　　アンケートのお願い

授業担当者　　加藤明代

この調査は個人名や機関名が出ることはなく、個人が特定されるものではありません。
今後の授業改善に役立てるものであり、そのための研究以外にはしようしません。

1．表現発表会全体に対する満足度は？（5段階の選択です。数字に〇印をつけてください）

満足度低い　←　1　2　3　4　5　→　高い

2．あなたのグループ発表に対する満足度は？

満足度低い　←　1　2　3　4　5　→　高い

満足するには、何が必要でしたか。　複数回答　可（3つまで）

①　時間（　）　②　練習する場所（　）　③協力（　）　④努力（　）
⑤　集中力（　）⑥　計画性　（　）
③　その他の理由　→（

3．あなたは能動的に練習に参加できましたか

①はい（　）　②どちらともいえない（　）　③　いいえ（　）

②③をつけた人に伺います。それはどういう理由ですか

（　　）

4　あなたにとって、（発表会まで）何が一番大変でしたか

（　　）

5．あなたにとって、何が　楽しかった、うれしかったですか。

（　　）

6．「2年生最後の発表会」として、どういう内容を希望しますか。
アイデアがあれば下記にお願いします。

（　　）

7．その他　感想、ご意見は裏面にお願いします。

ご協力有難うございました